Report for Creating Peace and Happiness
Musashino University Creative Happiness Incubation
武蔵野大学しあわせ研究所通信 Vol.152
2025 年 7 月 4 日発行

学生と考える、メタバースでの話しやすい場作りとは？

研究員
氏名　藤本かおる

教育にデジタル技術を利用する場合のモデルとして SAMR モデル（Puentedura、2006）がある。SAMR モデルは、教育においてテクノロジーをどのように選択し使用するか、評価はどうするかに関わるアプローチで、Substitution（代替）、Augmentation（拡大）、Modification（変形）、Redefinition（再定義）の 4 つのレベルからなる。「代替」と「拡大」ではデジタル技術により授業がより Enhancement（強化）され、「変形」および「再定義」は、それにより授業だけでなく学びが Transformation（変換）される。

例えば、授業の場を対面教室から zoom の用な web 会議システムにした場合、よほど授業デザインを工夫しない限り、「代替」に留まることが多い。しかし、web 会議システムを使って COIL のような 2 か国以上をつなげたプロジェクトベースの交流授業を行なう場合は、「拡大」になっていると考えられる。

本学ではメタバースとして ovice を使用している。メタバースは、今後 COIL などでも積極的に利用されると考えられるが、交流の場を単に教室から web 会議へ、web 会議からメタバースへ変えても、SAMR モデルの「代替」や「拡張」に留まる可能性が高い。また、教員だけが場作りをするのも十分ではない。現在の学生は、高校生の時からコロナ禍により web 会議を使用している。そこで、学生からの印象は今後の利用のヒントになると考え、ゼミ生と共に web 会議と ovice を使い比べた。

学生の ovice へアクセスした感想は、「かわいい」だった。Web 会議と違い、場の雰囲気を様々に変更できることから、ゼミで使用する空間は教室や会議室的ではなく、アウトドアのキャンプ場をイメージした場などを作った。その雰囲気がリラックスしやすいという意見があった。また、参加者が自分で違うグループに移動できる点も評価された。他のグループがどんな話し合いをしているかを知りたいとき、教員に頼まなくても自分で聞きに行ける点がいいということだった。

一方で、やはり操作性という点では、web 会議の方がシンプルでわかりやすいという声があった。システムの重さも指摘された。また、上記で良さとされたグループの移動は、積極的に動かないといわゆる「ボッチ」になってしまうので少し難しいという意見もあった。

教師の研修などからは見えてこない学生ならではの視点があり、今後の利用のヒントを得た。今後は学生と共に、実際にメタバースで話しやすい場作りを考えてして行く予定である。

Musashino University Creating Happiness Incubation
武蔵野大学しあわせ研究所　電話：03-5530-7730
東京都江東区有明３－３－３　メール：mhi@musashino-u.ac.jp